

公益社団法人 全国助産師教育協議会

望ましい助産師教育における
コア・カリキュラム

2020年版

公益社団法人 全国助産師教育協議会

2020年6月

目 次

巻頭言

「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム 2020年版」の公表にあたって 公益社団法人 全国助産師教育協議会 会長 村上明美.....2

1. 望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム作成の背景.....	3
1) 今後の日本の人口動態や社会情勢、周産期医療、女性医療を見据えた女性の健康支援の動向.....	3
2) 将来に向けて育成したい助産師像.....	5
2. 望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラムの考え方.....	5
1) 助産師に今後さらに期待される能力.....	5
2) 各教育機関の理念とコア・カリキュラム.....	6
3) 本コア・カリキュラムの基本となるもの.....	6
4) コア・カリキュラムの評価と新人教育へのシームレスな移行.....	7
3. 望ましい助産師教育におけるカリキュラム構成.....	8
1) コア・カリキュラムの枠組み.....	8
2) コア・カリキュラム.....	9
(1) A. 助産師として求められる基本的な資質・能力.....	9
(2) B. 社会・環境と助産学.....	9
(3) C. マタニティケア.....	10
(4) D. プレコンセプションケア.....	10
(5) E. ウィメンズヘルスケア.....	10
(6) F. マネジメント・助産政策.....	10
(7) G. 助産学研究.....	11
4. 望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム検討スケジュール.....	11
5. 表記について.....	13
参考文献.....	14

巻頭言

「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム 2020年版」の公表にあたって

公益社団法人 全国助産師教育協議会
会長 村上明美

皆様におかれましては、日頃より助産師教育の質向上に努めていただき、誠にありがとうございます。

この度、3年間という年月をかけて作成した「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム 2020年版」が、6月13日の総会にて承認され、会員の皆さまにお届けできることを大変うれしく思います。作成にご尽力いただいた高田昌代委員長はじめ、将来構想委員会のメンバーの方々には心より感謝申し上げます。

本協議会将来構想委員会は、理事会の意向を受けて、一層加速する超少子化、高度化する周産期医療、早急に求められる子育て環境の整備等、社会の動向を踏まえたうえで、助産師教育のあるべき姿について、原点に立ち戻って検討してきました。修業年限や必要単位数に縛られることなく、まずは、わが国において求められる助産師像をイメージしながら、助産師の基礎教育として「望ましい助産師教育」とは何なのかについて議論を重ね、教育内容を検討しました。どうぞすぐにも、それぞれの学校が展開している助産師教育の現状と比較し、改善に向けて「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム 2020年版」をご活用いただければ幸甚に存じます。

また、今後の課題として、「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム 2020年版」の実装に向けて、方法論を検討していくことが残されています。

本協議会では、2015年に「助産師教育における将来構想ビジョン2015」を公表していますが、その一つに「助産師教育は看護基礎教育を基盤の上に2年とする」をお示ししました。しかしながら、助産師教育の修業年限2年と「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム 2020年版」との整合性は、まだ検討されていません。「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム 2020年版」は修業年限を定めずに作成されましたので、ビジョンが示す修業年限2年では教育内容を包含できない可能性も考えられます。

今後の検討の過程においては、これまでと同様、適宜会員の皆様にご意見を伺いながら、コア・カリキュラムの内容を更新していきたいと考えております。加えて、当面の間（2年間程度を想定）は「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム 2020年版」の会員への普及を積極的に進めてまいります。

会員の皆様とともに、助産師教育の質の向上と発展を推進できますよう、引き続きご協力をお願いいたします。

2020年6月吉日

1. 望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム作成の背景

公益社団法人全国助産師教育協議会では、2015年に助産師教育の現状とその課題、日本の社会情勢、周産期医療の今後を想定して「助産師教育の修業年限は2年とする」という将来ビジョンを公表した。その後、助産師教育は2年課程大学院修士課程で行われる教育機関が増加の一途を辿っている。

全国助産師教育協議会では、刻々と変化する社会や医療を取り巻く状況を踏まえ、2年という修業年限にこだわることなく、助産師の基礎教育としての必要な教育内容を考える必要があると判断し、将来構想委員会において、「望ましい助産師教育コア・カリキュラム」を策定するに至った。

1) 今後の日本の人口動態や社会情勢、周産期医療、女性医療を見据えた女性の健康支援の動向

(1) わが国の周産期医療の方向性

日本の出生数は、2019年には90万人を下回り、前年比で5.92%と急減した。また、女性の第1子出産平均年齢は、30.7歳と1985年と比べると4歳上昇し、出産年齢が高くなり、40歳の初妊婦も珍しくない状況になっている。そのため、ハイリスク妊婦も増加し、ハイリスクは基幹病院へ、ローリスクは診療所・助産所等へと、役割分担した医療体制の構築が必要となってきた。さらに、産婦人科医師の減少と地域偏在化により、地域の基幹病院を集約化し大規模化・重点化が必須の状況にある。これについては、医療全体でタスクシフティングやタスクシェアリングが進んでおり、産科領域においては、日本産科婦人科学会、日本看護協会、日本助産師会とで、医師から助産師へのタスクシフティング構想が既に進められている。

そのため、高度医療が必要なハイリスク妊産婦へのケアと自立して妊娠・出産の生理的経過を支援するローリスク妊産婦へのケアのどちらもが必要となり、スペシャリティの分化が進むことが予測される。

(2) 地域とつながる助産師活動

近年わが国では、核家族化や女性の社会進出が進む中で、出産後の女性が抱える育児不安や育児困難感の問題も深刻化しており、児童虐待の相談件数も増加の一途である。これらは、成長過程における生活経験の不足や第1子出産年齢が高いため第1子と第2子との出生の間隔が短いことも要因の一つと言えよう。また、望まない妊娠、未受診妊婦、産後うつ、DV、被虐待の母親、母親の自殺などさまざまな問題・課題を抱える妊産婦への支援の必要性が高まっている。

そこで、厚生労働省は、妊娠期から子育て期において切れ目ない支援を打ち出し、多職種連携・協働における支援体制の構築を図っている。助産師は、医療機関での妊娠・分娩・産褥期および新生児のコアとなるケアだけではなく、地域における妊娠期から信

頼関係を築いた母子とその家族の子育て期までの継続したケアの習得が期待される。

(3) 妊娠したいときに妊娠できる身体づくり

これまで挙児を望めなかった女性やカップルも医療の進歩により、それが叶う時代になってきた。一方で、母体や胎児が健康に妊娠生活を送るための要因もわかってきた。例えば、妊娠したいと思ってから不妊治療を開始するのではなく、それまでに妊娠に適した年齢の知識が必要である。

また、将来の妊娠を考えながら女性やカップルが自分たちの生活や健康に向き合うという、プレコンセプションケアの重要性が WHO から提唱されている。

以上のことから、いつでも妊娠可能な身体づくりを、これまでの思春期における性教育はもちろんのこと、女子大生・勤労女性・結婚直前の女性など対象を広げたケアが今後さらに必要となってくる。

(4) ダイバーシティ (多様性)

日本は少子高齢化が進み、労働力不足のために外国人労働者が増加の一途を辿っている。外国人労働者は、生殖年齢にあることが多く、周産期においても、異なる言語・異なる文化・異なる価値観を有する在留外国人女性やカップルへの健康支援がますます必要となってくる。多様性が当たり前の時代が来るのは、そう遠くないことである。妊娠期、分娩期、子育て期等において、多様な文化、多様な価値観を尊重したケアが求められる。

(5) 年齢を重ねてもいつまでも元気に

日本の少子高齢化は今後もすすみ(図1)、人生100年時代に向けた政策がとられている。さらに2040年には高齢者の人口の伸びは落ち着き、現役世代(担い手)が急減する時代を迎え、健康寿命の延伸やシニア人材の活用等で持続可能な社会を目指すことになる。特に、健康寿命の延伸のためには、高齢になっても健康で自立した生活を目指すことが重要であり、そのためには中高年の時期から、楽しく、元気に、QOLを維持するために、更年期女性や老年期女性に対して

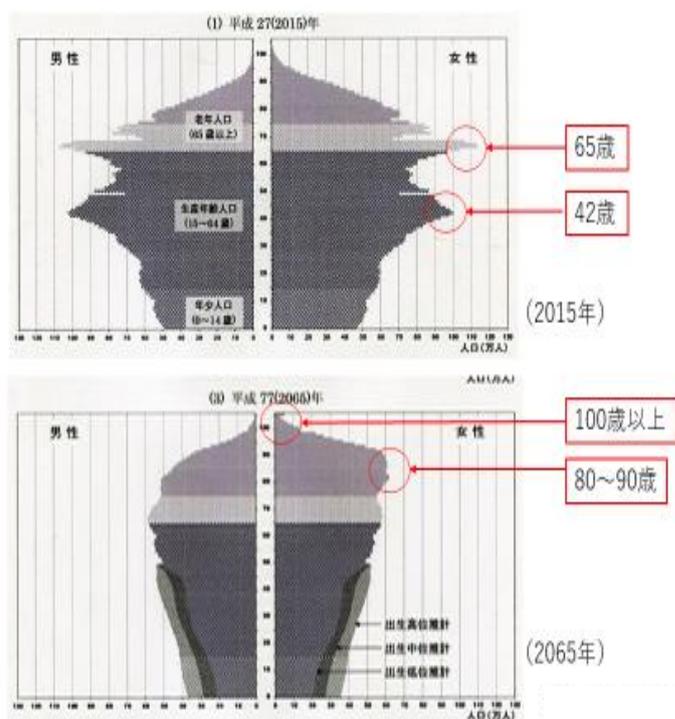


図1. 人口ピラミッドの比較 (2015年, 2065年)
人口統計資料集: 国立社会保障・人口問題研究所

セクシャルティを含めた健康づくりの支援となるウィメンズヘルスの能力が必要とされる。

2) 将来に向けて育成したい助産師像

望ましい助産師教育のコア・カリキュラム作成にあたり、そのカリキュラムの目標となる、将来に向けて育成したい助産師像を設定する必要がある。この助産師像は、前述した、今後の我が国の人口動態や社会情勢、周産期医療、女性医療などの動向を見据え、約10年後に助産師に求められる能力を備えている助産師を想定した。

将来に向けて育成したい助産師像を、以下とした。

生涯にわたる女性の性と生殖に関連した健康に資するために、助産師として社会に貢献できる人

- ・助産師として求められる基本的な資質・能力を身につけること
- ・社会の動向や保健・医療・福祉の方向性を見据えつつ、多様な価値観を受けとめられること
- ・多職種連携を基盤に地域とつながることができること
- ・助産師の役割・責務を自覚して自律・自立できること

2. 望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラムの考え方

1) 助産師に今後さらに期待される能力

前述した人口動態、社会情勢、周産期医療、女性医療から、助産師に今後さらに期待される能力として、以下の(1)～(6)が挙げられた。

- (1) 切れ目のないケアのために、あらゆる場におけるケアの拡大
- (2) プレコンセプションにある女性へのケアの強化
- (3) 更年期から老年期女性のケアの強化
- (4) 助産の基盤となる医学・薬学の専門的知識の強化
- (5) 多様な文化的背景をもつ女性・母子やその家族の理解とケアの強化
- (6) マネジメントと政策に関わる能力の強化

コア・カリキュラムの作成は、学生の助産師教育修了時の資質や能力の質保証に意義がある。また、医療関係者とチーム医療を行うにあたり、医学・歯学・薬学・看護学のモデルコア・カリキュラムを大いに参考にし、できるだけ同様の様式とした。また、看護学教育ですでに習得している資質・能力であっても、助産師教育においても重要であるとしたものは列挙した。特に、ウィメンズヘルスやプレコンセプションの能力においては、母性看護学等と重複する部分があることは否めない。

2) 各教育機関の理念とコア・カリキュラム

望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラムは、教育機関の種類や修業年限に関わらず、社会が必要としている初学者の助産師が学ぶべきカリキュラムとして考えられている。そのため、すべての内容が助産師教育の「コア」である。しかし、各教育機関は、教育理念に沿った独自のカリキュラムをもっているため、このコア・カリキュラムにそれらを追加することで、その教育機関独自のカリキュラムが出来上がることになる。そのため、学修目標を達成するための教育方法や評価については、各教育機関において進めていただきたい。

社会の情勢や周産期を取り巻く情勢は、思ったより早いスピードで出現することも、想定していないことも起こる可能性はある。周産期医学、助産学の研究も絶え間なく前進している。そのため、随時、必要に応じて見直し、改訂が必要である。

3) 本コア・カリキュラムの基本となるもの

望ましい助産師教育のコア・カリキュラムを作成するにあたって、ICMの「助産実践に必須のコンピテンシー：Essential Competencies for Midwifery Practice」(2019)、WHO新ガイドライン「肯定的な出産体験のための分娩期ケア」(2018)、日本助産師会の「助産師のコア・コンピテンシー」を参考にした。

助産師として求められる基本的な資質・能力の作成にあたっては、

- 質 (Quality)
- 公平性 (Equity)
- 尊厳 (Dignity) を中心の考え方とした。

ICMの「助産実践に必須のコンピテンシー」(2019)の枠組みの構造は図2のとおりであり、以下の「一般的なコア・コンピテンシー」13項目を参考にした。

- (1) 自律的な実践者として自身の決定と行為について責任を負う
- (2) 助産師としてのセルフケアと自己研鑽に関する責任を負う
- (3) ケアの様々な側面を適切に委任し、監督する
- (4) 研究を実践の参考として活用する
- (5) 助産ケアの提供においては個々の基本的人権を擁護する
- (6) 助産実践を管轄する法律と規制要件、行動規範を遵守する
- (7) 女性がケアに関する個人の選択を行うことを促進する
- (8) 女性・家族、医療チーム、地域社会のグループとの効果的な対人コミュニケー

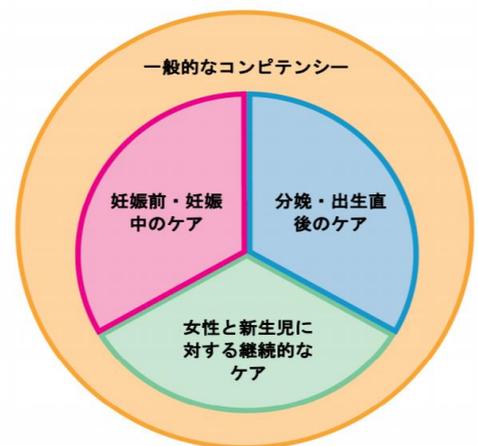


図2. 助産実践に必須のコンピテンシー 枠組みの構造

ションを行う

- (9) 施設および地域社会（女性の自宅を含む）において正常な分娩経過を促進する
- (10) 健康状態のアセスメント、健康リスクのスクリーニング、母子の一般的な健康と福祉の推進を行う
- (11) 生殖と新生児に関する一般的な健康問題の予防と治療を行う
- (12) 異常や合併症を認識し、適切な治療や紹介を行う
- (13) 身体的・性的な暴力・虐待を経験した女性のためのケア

4) コア・カリキュラムの評価と新人教育へのシームレスな移行

助産師教育の望ましいコア・カリキュラムは、助産師教育修了者において、その知識の取得、技能の習熟のみならず、助産師として求められる基本的な資質・能力の習得を目指している。そのため、行動目標を表し客観的評価を可能にしている。コア・カリキュラムの評価は第三者の評価をもつて行う必要があり、その具体的手法が現在医学部等でも用いられている共用試験の OSCE : Objective Structured Clinical Examination と CBT : Computer Based Testing である。社会に対して助産師としての専門性を保証していくためにも共通した評価の構築が期待される。

また、コア・カリキュラムは、教育機関別ではなく助産師教育修了者としてその後の新人研修や助産師ラダーへの移行、助産師基礎教育から生涯教育への橋渡しをシームレスに行う基礎となり得る。

これらを図示したものが、以下の「助産師教育の学修モデル」である（図3）。

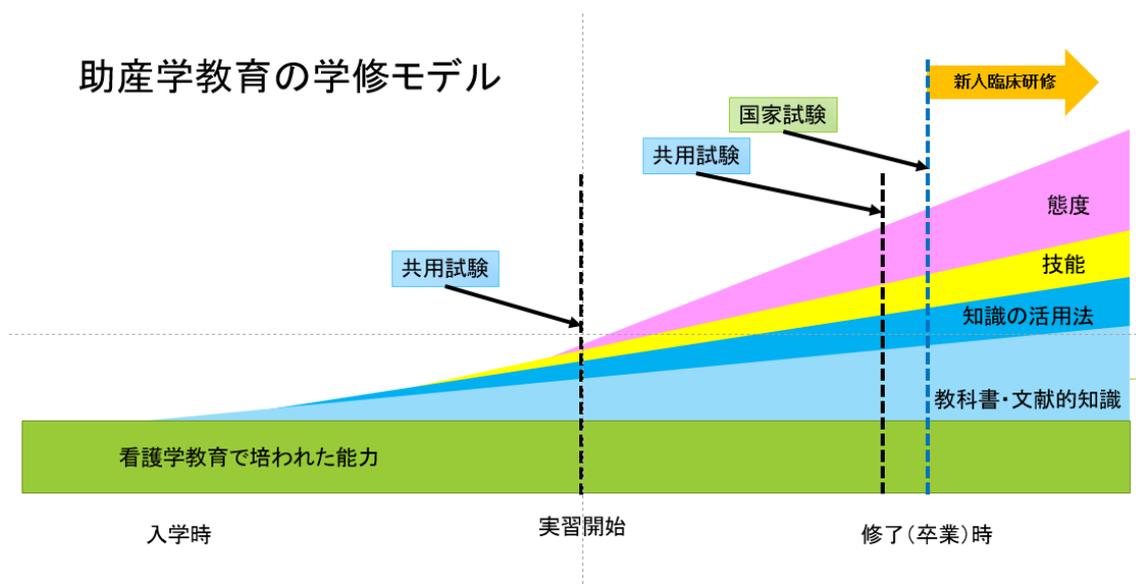


図3. 助産師教育の学修モデル

3. 望ましい助産師教育におけるカリキュラム構成

1) コア・カリキュラムの枠組み

本コア・カリキュラムは今後到来するであろう社会の動向や女性等の背景から助産師が期待される能力を教育内容として検討した。その内容と構成については、医学教育モデル・コア・カリキュラム、看護学教育モデル・コア・カリキュラムの枠組みを参考とし、日本助産師会の「助産師のコア・コンピテンシー」、ICMの「助産実践に必須のコンピテンシー」（2019）等を資料として検討したのち、保健師助産師看護師学校養成所指定規則や助産師国家試験出題基準との整合性を図った。また、すでに提示されている歯学・薬学教育のモデル・コア・カリキュラムも医療系人材養成の内容として参考にした。

本コア・カリキュラムは、医療の向上や対象者の多様なニーズ、文化的背景や社会の変化に対応した助産を実践できるコンピテンシーズの獲得に向けて必須となる教育内容を含むものであり、図4に示すように構造化することができる。それは、A. 助産師として求められる基本的な資質・能力、B. 社会・環境と助産学、C. マタニティケア、D. プレコンセプションケア、E. ウィメンズヘルスケア（プレコンセプションケアを除く）、F. マネジメント・助産政策、G. 助産学研究の7つの大項目から構成される。

この構成は、本コア・カリキュラムの理念を連動した特徴がある。1つは、助産師は従来ローリスクを対象としていたが、ローリスクからハイリスク妊産婦までグラデーションであり線引きができないこと、またすべての妊産婦のケアが助産師の役割であることから、マタニティケアの中には、ローリスクからハイリスクまですべてを含めた。そのため、表現は線引きをイメージさせる「正常」ではなく「ローリスク」とした。この様にハイリスクケアも行うことにより、解剖生理、薬理、リプロサイエンスとしての臨床推論の能力を強化している。2つ目は、切れ目のないケアのために、医療機関内だけでなく地域（自治体を含む）、学校などの場でのケア、妊娠期から育児期（3歳児育児）までの継続ケアを含めている。3つ目は、プレコンセプションケアを独立させたこと、4つ目としては、更年期から老年期女性のケアの強化としてウィメンズヘルスケアを独立させたことである、5つ目は、社会的な側面として、多様な文化的背景をもつ母子やその家族の理解とケアを含めている、最後は、マネジメント・助産政策を1つの柱とし、社会変化に参画していく視点を持つための教育の必要性を強調している。

本コア・カリキュラムは、大項目の内容を構成する教育内容のまとまりを項目とし、各項目の教育内容全般を「ねらい」として示し、その項目について学習者が修得すべき具体的レベルを「学修目標」として示している。なお、A～Gの学修目標の修得レベルは「説明できる」、「演習でできる」、「実施できる」としている。

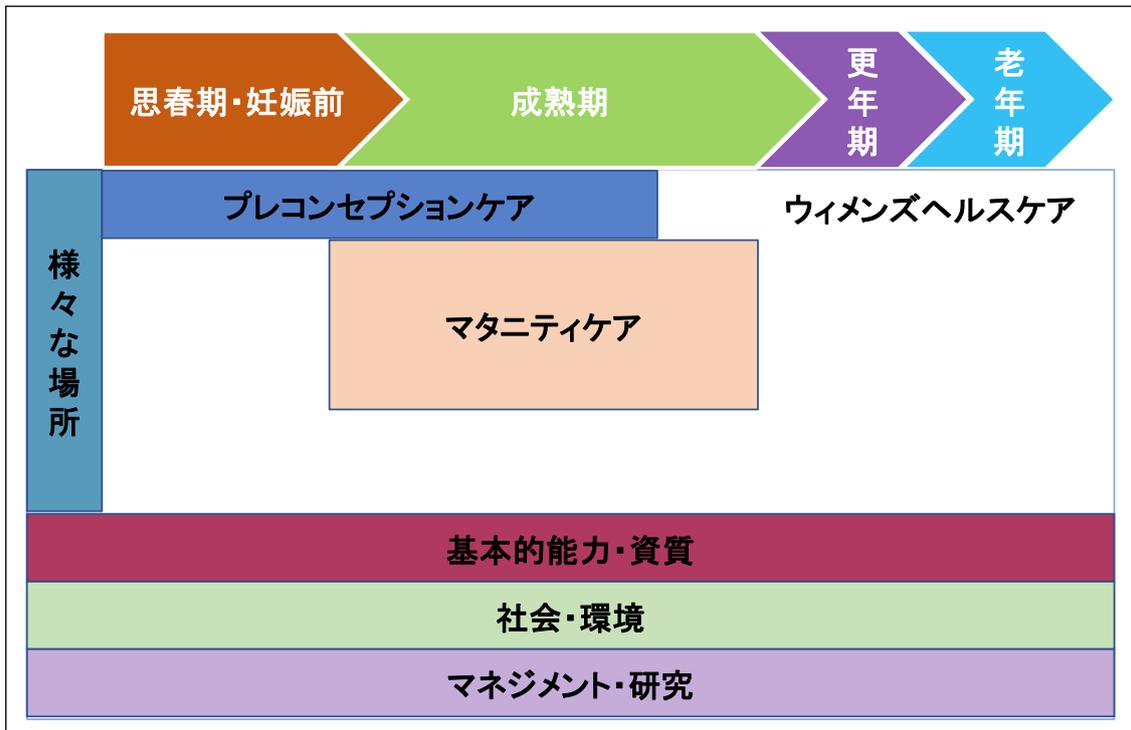


図4. 望ましい助産師教育のコア・カリキュラム構成構造図

2) コア・カリキュラム

(1) A. 助産師として求められる基本的な資質・能力

助産師としての役割・責務を遂行していくために、基本となる資質や能力が求められる。プロフェッショナリズム、助産にまつわる知識と問題解決能力、助産師としての技能と助産ケア、多職種との協働と女性等との共同、コミュニケーション能力、助産師が行う医療安全と危機管理能力、科学的探究、生涯にわたって自律的に学ぶ姿勢とキャリア開発の8項目からなる。

助産師として基礎となる必須の知識、助産師の理念、リプロダクティブヘルスと女性の人権、助産師の定義と業務内容・業務範囲を説明できることは勿論のこと、助産師としての高度な職業倫理について考えるための基礎となる知識や意思決定プロセス、またケア対象者や多職種との協働とコンサルテーション、コミュニケーション、カウンセリンについて説明できる能力が求められる。そして、助産師としての自律性を理解し、それが実現できる要素について考察できることが望ましい。

(2) B. 社会・環境と助産学

社会・環境と助産学との関連を、出産の歴史や文化、地域社会や社会システムから説明する能力が求められる。さらに、助産師の法的役割と責任・義務について理解し、遂

行する能力が求められる。

助産・出産の歴史、母子とその家族を支える地域や文化、社会システムと健康、社会における助産師の法的役割と責任の4項目からなる。

母子とその家族を取り巻く文化や環境、社会システムと健康について、また、社会における助産師の役割と責任、法的義務や開業権について説明できる能力が求められる。

(3) C. マタニティケア

ローリスクの妊娠・分娩・産褥における身体的・心理社会的状態の診断とケア、ローリスクの胎児・新生児・乳幼児の正常な成長・発達の診断とケアを実施できる能力が求められる。

ハイリスクの妊娠・分娩・産褥・新生児の診断とケアにおいて、リスクの状況に応じて説明もしくは理解できる能力が求められる。

また、実践においては、ローリスクの妊娠・分娩・産褥・新生児・乳児期にある母子とその家族を受け持ち、ウェルネスの視点で助産診断過程を展開しケアを実施する能力、および正常からの逸脱予防のための助産ケアや緊急時の対応について理解する能力が求められる。

さらに、自立してローリスクの分娩介助ができる能力を修得し、母子やその家族への切れ目のない支援のために、妊娠期から産後4か月まで継続して助産ケアを実施することが求められるとともに、地域における母子保健活動や多職種連携・協働の必要性を理解する能力が求められる。

(4) D. プレコンセプションケア

現在妊娠を計画している女性だけではなく、妊娠可能年齢にあるすべての女性やカップルを対象に、性と生殖の自己決定を支援し、女性や将来の家族が妊娠を考えたときにすぐに実現できるように健康的な生活を送れることを支援する能力が求められる。

(5) E. ウィメンズヘルスケア

女性のライフサイクル各期の身体的・心理社会的な特徴や変化の理解と性と生殖に関連した健康を支援する能力が求められる。さらに、女性がおかれている社会状況やジェンダーにまつわる健康など、多様性(ダイバーシティ)の実現を目指した社会において、健康を支える必要性を理解する能力が求められる。

(6) F. マネジメント・助産政策

周産期における助産管理の実際、およびリスクマネジメント・災害時等の助産師の役割について理解できる能力が求められる。また助産ケアが医療政策に反映されるプロセスとその意義を理解できる能力が求められる。

(7) G. 助産学研究

助産学では、助産実践の改善・向上のために必要とされる研究的な思考と知識・技術を学修し、助産学の発展に貢献する態度が求められる。

修士課程修了時には、規定の単位を取得し、研究指導を受け、各大学院による修士論文審査と試験に合格することが必要である。修士課程の助産師教育課程では、助産ケアに関するリサーチエビデンスを検索して、文献を批判的に読み、複数の文献検討の結果を統合して、その結果を助産ケアに活用できる能力が求められる。また、助産実践の改善や向上を図っていくために、研究の過程を学修し、研究倫理を考慮しながら研究を実施する基礎的能力を身につけ、助産ケアの開発、評価および検証など、課題を探究できる能力が求められる。

4. 望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム検討スケジュール

将来構想委員会では、表1に示すように「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム（案）」を作成し、検討を重ねてきた。

表1. 望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム検討スケジュール

2018（平成30）年	
10月7日	「望ましい助産師教育コア・カリキュラム（案）」について検討（将来構想委員会） 現行の教育を踏まえ、厚労省の到達目標や ICM の「助産実践に必須のコンピテンシー」・看護師の特定行為研修の教育内容を考慮し検討
12月8-9日	「望ましい助産師教育コア・カリキュラム（案）」について検討（将来構想委員会）
2019（平成31・令和1）年	
1月26-27日	「望ましい助産師教育コア・カリキュラム（案）」について検討（将来構想委員会）
3月17日	理事会にて、「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム（案）」について報告
4月14日	「望ましい助産師教育コア・カリキュラム（案）」について検討・作成（将来構想委員会）
6月9日	全国助産師教育協議会にて、各教育機関に分かれて「望ましい助産師教育コア・カリキュラム（案）」について説明と意見交換
7月6日	北村聖先生に依頼して、「医学教育モデル・コア・7カリキュラム～卒前卒後教育のシームレスな医学教育」について情報収集（将来構想委員会）
7月31日	「望ましい助産師教育コア・カリキュラム（案）」について検討（将来構想委員会）
9月21日	新カリキュラム（2022年より改正される助産師教育の指導ガイドラインの変更が9月13日付厚労省HPにて公開された）を受けて、「望ましい助産師教育コア・カリキュラム（案）」全体の確認および考え方について検討・修正（将来構想委員会）

11月3日	「望ましい助産師教育コア・カリキュラム（案）進捗状況報告会・研修会」開催 （日本赤十字看護大学にて） ・北村 聖先生：特別講演「医学教育モデル・コア・カリキュラム」 ・コア・カリキュラム進捗状況報告・意見交換
12月8日	理事会にて、「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム（案）」研修会について報告
12月25日	会員校の皆様へ「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム（案）パブリックコメント募集」について、メール配信依頼 募集期間：2020年1月6日（月）～2020年1月24日（金）まで
12月27日	全国の会員校へ「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム（案）」配信
12月27日	「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム（案）の今後の活用に関する展望」について検討（将来構想委員会 web 会議）
2020（令和2）年	
1月15日	看護協会、助産師会、産婦人科医会へ「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム（案）」検討依頼（4団体連絡会時）
1月25日	パブリックコメントの返答検討（将来構想委員会 web 会議）
3月9日	パブリックコメントに対する返答確定（将来構想委員会 web 会議）

5. 表記について

- コア・カリキュラム（別表）では、ABC、123、1)2)3)、(1)(2)(3)という順で付番を統一した。ただし、学修目標は全て①②③と付番をした。
- 対象となる人（人々）の表記については、妊娠期にある女性は「妊婦」、分娩期にある女性は「産婦」、産褥期にある女性を「褥婦」、母親と新生児または妊婦と胎児を「母子」、家族を含む場合には「母子とその家族」、母親や父親が特定しなくてもよい場合は「親」、夫と限定しなくてもいい場合は「パートナー」、妊産婦も含めた女性の場合は「女性」を用いた。ただし、文脈上普遍的に通用している表現を用いる方が適切である場合は「対象」を用いることとした（「対象疾患」など）。
- 「学習」と「学修」の表記については、原則として「学修」を用いることとした。ただし、文脈上普遍的に通用している表現を用いる方が適切である場合は「学習」を用いることとした（「生涯学習」など）。
- 前掲の単語の同義語、説明、具体例等を追加するときには（ ）を使用した。
例）多様な生涯学習機会の獲得方法（実践の振り返り、自己学習、職場における継続教育、学会や専門職団体による各種研修、大学院、共同研究等）
- 日本語とそれに対応する英単語を併記する場合は英語を（ ）で示し、略語の場合はスペルを初出時に示した。
例）標準予防策（Standard Precaution）
- カタカナ化した英語はとくに英語表記を示していない。
例）コミュニケーション、ローリスク、ハイリスク
- 団体・組織名については、法人格の表記を省略した。
- 学修目標の文末について
 - ・学修目標は、アウトカム基盤型教育から、「説明できる」、「演習でできる」、「実施できる」とした。「実施できる」は、臨地において実施できることを指す。
 - ・保健指導という言葉は使わず、相談・支援とした。
 - ・「参画できる」は、「参加できる」よりも計画の段階から加わり、主体的に実行できる能力を示す。

参考文献

- 大学院設置基準:
http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/kitei/reiki_honbun/w002RG00000950.html
- ICM (International Confederation of Midwives) : Essential Competencies for Midwives Practice. 2019 update. 2019.
https://www.internationalmidwives.org/assets/files/general-files/2019/10/icm-competencies-en-print-october-2019_final_18-oct-5db05248843e8.pdf
- 国立社会保障・人口問題研究所: 人口統計資料集. 2020年版.
<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2020.asp?chap=2&title1=%87U%81D%94N%97%EE%95%CA%90I%8C%FB>.
- 公益社団法人日本助産師会: 助産師のコア・コンピテンシー.
http://www.midwife.or.jp/midwife/competency_index.html.
- WHO: WHO recommendations Intrapartum care for a positive childbirth experience.2018.
<https://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/260178/9789241550215-eng.pdf?sequence=1>
- WHO: WHO 推奨 ポジティブな出産体験のための分娩期のケア.2018 (日本語版)
<https://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/272447/WHO-RHR-18.12-jpn.pdf>

○ 望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム検討メンバー

〈将来構想委員会〉

- ◎委員長 高田昌代（神戸市看護大学大学院）
- 委員 秋田浩子（専門学校ベルランド看護助産大学校）
- 委員 江藤宏美（長崎大学生命医科学域）
- 委員 倉本孝子（社会医療法人愛仁会本部）
- 委員 谷口初美（九州大学大学院、福岡女学院看護大学〈2020年4月〜〉）
- 委員 村上明美（神奈川県立保健福祉大学）
- 担当理事 鳥越郁代（福岡県立大学大学院）